

スリリング巻きをもう一度

令和5年度「おおいたシニアエッセイ」特選

大分市

やまかげ まさのぶ
山蔭 政伸

母・君子は父と同じ昭和6年生まれ、21歳で結婚した。平成20年に父が77歳で亡くなった後も、一人暮らしを楽しんでいた。

趣味が多く、人づきあいが好きだった。洋裁と人形づくりに熱心で、自宅を教室につくりかえて教えていた。出来上がった人形はどんどんあげていた。自宅近くの銀行のカウンターには、いまでも母の人形が並んでいる。

それよりも好きだったことが料理だった。私は母がつくる重箱弁当が楽しみだった。私が好きなものばかりが並んでいるからだ。筍卵とじ、細切り大根明太子まぶし、ゆで卵ハムのせ焼き、あんこ食紅まぜ真っ赤おはぎ。

一番よくつくっていたのが、具たくさん巻き寿司だった。具を包みきれずに何度も巻き直したのか、ご飯がベトベトになっていて糊を食べているかのようなのだが、この口当たりが好きだった。色味は良く、写真に撮ると映えていた。ただ、文句があった。母は味見をしないために、砂糖と塩のあんばいがバラバラなのだ。しょっぱい巻き寿司は災難だ。私はこれを「スリリング巻き」と呼んでいた。

母は食が細く、自分で楽しむ料理ではなく、人にあげるための料理づくりが好きだった。教室があるたびにみんなに料理をふるまった。その時には「巻き寿司ができたから取りに来よ」と、電話がかかった。私の子は独立しており、夫婦だけの生活。2人が食べる量は多くない。なのに、母のつくる重箱弁当は量が多く、重箱が2つある時もある。食べきれずに冷蔵庫に入ったままもあり、妻は「もういらない」と言うので、私が全部食べた。

私が結婚して43年間、重箱弁当をもらっていた。それが昨年1月末に突然、終わった。

母は満90歳で天寿を全うした。前日まで、庭で育てた野菜を収穫して、自分の食べる分をきちんと料理していたのに。

母の写真の整理をしている。映えた「スリリング巻き」がたくさん出てきた。もう一度、食べてみたいものだ。しょっぱくてもいい。

